

我ら卒業50年 ⑫回生

東京オリンピックが開催された昭和39年に卒業した土木⑫回生は平成26年5月11日静岡県焼津グランドホテルに集合した。入学あるいは卒業を同じくした28名は時を経て現在22名になった。その八割に当たる18名が顔をそろえる。数十年ぶりに会う友もいる。姿・形の経年劣化はやむを得ないが、すぐに学生時代に戻る。

亡き友の冥福を祈った後、宴会となり、それぞれ50年の人生を語る。いまだフルタイムで仕事しながら水泳のマスターズ大会で世界ベスト5の記録を達成したスーパーマン。古希を迎えて芸術大学の通信教育に入学し洋画制作に苦戦している男。カソリックに改宗した男、禅修行で卒業が遅れた男、実家のお寺を継いでいる男がいるが宗教論争にはならない。わがクラス最強の下半身をもつ男が家庭裁判所調停員として最高裁長官表彰を受けており、ブラジルで大女を泣かせたと豪語する男は今では孫のお守。学生時代からクラシックギターに打ち込んでいた男は退職後も弟子がおり、教室の竹の箒を笛に変えた男は今も日野皓正氏指導のジャズバンドでラッパを吹いている。そんなに勉強が好きだと思わなかった男は城郭の研究で博士号を取り今も学会活動に走り回っている。御苦労さま。単身赴任経験が多いわがクラスは半数が現在厨房に入っており奥方を喜ばせている。体調不良を訴えながら巨体を揺すっている男は退職後継いだ農作業に汗を流しており、頭部切開手術を受けた男も元気にヨサコイ踊りや地域活動に走り回っている。日本の医学は進歩している。鉄道好きの男は今は熊野古道・中山道・東海道ともつばら歩き続けている。ゴルフ大好きな男もさすが回数は減らし民生委員など地域に溶け込んでいる。故郷に育った家が残っている男は時々一人で帰省して風を通していている。家族揃ってとはいかないようだ。元気維持・ボケ防止のためには会話と刺激を求め、家を出ることも必要な年齢になっている。ボランティア・地域活動・趣味の会・同窓会。みんな努力している。50年生き続けると下世話な話も含蓄深い話になっていく。

二時間半の宴会はアツという間にお開きになり、二次会・三次会と深夜まで語り明かす。2020年の東京オリンピックまではお互い頑張ろうということになる。

翌日は久能山東照宮、日本平、世界遺産に指定された三保の松原とバスで回る。卒業50周年を祝福してくれるかのように霊峰富士山もその姿を現してくれる。修学旅行そのものである。最後に清水次郎長の墓にお参りし、今後の勝負運をお祈りし清水駅で解散する。

暇人8名はもう一泊し、旧東海道を興津宿から由比宿まで峠越えを歩く。眼下に東名高速道路・国道1号線・東海道本線が並走している。江戸時代の難所を克服した我が土木技術の素晴らしさを誇らしく思いながら、名物桜エビを味わい解散する。

また元気で再開しよう。

(文責池野)

